

加藤辨三郎 述

# 浄土和讃

15

文責 本誌編集部



## 業を超える道

悪業がおのずから悪心を起こさせるが、それを如来の本願力によって消滅させてくださる。これは如来のたいへん深い考えであります。これを履き違えると、今度は悪いことをしてもいいとおもう人ができます。それははからいというもので、明らかに

こちらのはからい、凡夫のほしいままなる心であつて、欲望の変形です。

如来は、そういう凡夫を哀れとおほしめされて、それを自然に消滅させてくださいます。それが如来の御智慧です。それがお念佛です。ですから、わたしたちにも宿業にさしまかせながら、本願を信じ念佛もうす、この道一筋が残っているわけです。その

道一つで自然に消滅させてくださる、業も自然に消滅させていただくのです。

念佛もうす道一筋で、業も自然に消滅させていただくのですが、ここがなかなかわからないところです。この間、生命科学の専門の研究者の方と、NHKで対談しましたが、業の消滅の点になると、どうしても話が出会えませんでした。釈尊といえども、わたしは人間の業には勝てないとおっしゃいました。釈尊は、人間の業を救うのは、わたしが三十五歳から今日まで説いてきた四諦八正道で、これが、要するに業を超えていくところの道であると、説いています。業を直接消すことは、お互いにできません。しかし、四諦八正道の道理がほんとうにわかったら、みずから業垢を除いて解脱を得ることができるというのが、釈尊の教えです。それが涅槃を得ることです。ですから、このご和讃に「解脱をう」と書いてありますが、「業垢をのぞいて涅槃をう」と読み変えても、一向さしつかえはないとおもわれま

す。

輪廻などもそうです。輪廻の思想も深いです。輪廻の思想は、佛教以前からインドにありました。釈尊は、その輪廻の業思想を教えながら、しかもこれを超える道は、四諦八正道の教えであるとおおせになっていきます。四諦八正道の道理がほんとうにわかれば、輪廻ということも自然消滅します。ですから、この世の一生で、わたしたちは再び迷う世界に出ることはないのです。これが佛教のありがたいところです。それを親鸞聖人は、「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」と有名な言葉で、同じことを説いておいでになります。

釈尊ご自身は、自分は自分の梵行、つまり自分の悟りを開く行の、為すべきことはみな為し終わつたと、安心してお亡くなりになりました。もう迷いを解脱していただけるから、再び迷い出ることはなかった。そして法を残してくださいました。それをわたしたちは、いま学んでいるのです。

## 業による惑い

とかく、業にしても、輪廻にしても、自然に消滅する。そのことが、わからないので迷って、死んでも迷って、まだうらみが残るおそれがあるのです。

願わくは急ぎ念佛を称えることです。念佛は、四生の因を滅します。四生とは、鳥になったりボーフラになったり、迷いの世界のあらゆる生きものです。これが一切消滅する、つまり「横超断四流」という言葉で書かれています。生老病死を断じてしまうのです。これが佛教の悟りです。

業は、ほかの動物でも、みんな持っているのです。ところが彼らは、それを業とは感じていない。力が強いものが勝つ。ヘビがカエルを呑むのは当たり前なえだとおもっている。彼らには宿業感が感じられないようです。そこで彼らは業という惑いがない。惑うのは人間です。惑いは人間の大きいなる煩惱の一つに数えられています。

佛教の根本の教えのなかで、人生は苦であると説かれています。その苦はどこから来るのでしょうか。これはいろいろな説かれ方がされています。業でい

えば、業・惑・苦の三つの言葉が、因縁の道理として説かれているのです。人間は、業というものを自覚し、その業がなんとかならないかと惑う。そこで、難行苦行すればなくなるのではないかとおもう。しかしそれは惑いです。その惑いが苦しいことなのです。業が原因で、惑いが縁になって、そして苦という結果があるのです。しかも業はサラサラと動いているのではない。そこで惑い苦しむのでしょうか。その惑いを解くのが信心であります。本願を信じ念佛もうすことよって、初めてその惑いがなくなるのです。

話が飛び飛びになりましたが、清浄光佛にもつあ遇うことができたなら、おのずから業の垢を除いて悟らせてくださるのです。それがこの第七番目のご和讃のねらいであります。

## 随喜のころ

つぎの第八番目のご和讃に移りましょう。

慈光はるかにかふらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を帰命せよ

このご和讃は、拝唱するだけで、胸が明るく、うれしく、喜びを感じます。百人一首では、わたしは「久方のひかりのどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ」という歌が好きなのです。その光景はどうかそのものです。「慈光はるかにかふらしめ」というと、すぐ春光喜々として、春の光は喜びを感じさせます。わたしは山陰の生まれです。冬が厳しいから、春の光を特に感じるのかもしれませんが。冬ごもりが終わって、土手にはいろいろな花が咲きます。

五月ともなれば、至るところレンゲ畑です。野にも山にも春が来たというときには、子供心にも、春の光の喜びを感じます。むしろ子供心なればこそ一層素直に、ああ、春が来たという喜びを感じたものです。今でもそれは嬉しく感じるので。この「慈光はるかにかふらしめ」は、もちろん如来の光です。これは歡喜光といわれます。前のご和讃の光が清浄光佛、これが歡喜光佛、そのつぎが智慧光佛です。これはすべて、わたしたちに喜びを感じさせるところの光です。ああ、この光に出会ってよかったとおもうのです。

「慈光はるかにかふらしめ ひかりのいたるところには 法喜をうとぞのべたまふ」、これを親鸞聖人は、みのりを喜ぶ、佛法を喜ぶ心だともうされています。みのりを喜ぶことは佛法を喜ぶことです。それで「法喜」とおおせになっているのです。

喜びということで、金子大榮先生から、喜びのうちで一番深い喜びとは、人さまの喜びを自分の喜び

以上に喜ぶ心だと、教えられました。このお言葉を伺って、わたしは非常に感激し、なるほどとおもいました。人さまの喜びを知って、自分の喜び以上に喜ぶ心、これを随喜といいます。随喜ができれば、ほんとうの喜びは知らないといっているとおもいます。

物を貰ったといっっては喜びます、子供が生まれたといっっては喜びます。たしかに喜びです。だが、ただ自分だけが喜んでいきます。その喜びは浅いのです。人さまがたいへんもうけた、ああ、結構でしたと、自分がもうけた以上に喜べたら、それがもつと深い喜びなのです。しかし、本願を信じ念佛もうす人ならば、それが自然に与えられるところの法喜、つまり法の喜びになっていきます。けれども逆にいうと、法の喜びを感じる人は、人さまの喜びもわが喜びとして、喜ぶことができます。ゆえに、この喜ぶという言葉は、佛教では非常に大事な言葉になっています。

### 喜びの光

佛教には、四無量心という言葉がありますが、これは佛さまの心です。慈・悲・喜・捨といわれ、四つの広い広い、また深い深い佛さまのお心があるのです。慈は慈しみということです。それは他人さまの心のなかに自分を見る、それが慈しみの心である、金子大築先生はおっしゃいました。自分の心のなかに、人さまの苦痛がわかるというのが悲しみの心です。それが無量、つまり限りなくあるのです。これは如来にして初めてできることです。それから喜とは、随喜・法喜で佛法の喜びですが、解りやすくいえば無量の随喜心です。わたしたちが何かいいことをしたら、一番お喜びになるのは佛さまではないかとおもいます。わたしたちが手を合わせて、南無阿弥陀佛と称えたら、それを喜ばれるのは阿弥陀佛にましますのではないのでしょうか。お前も、わしのいうことがわかってくれたかとお喜びになられま

す。これが法の喜びで、自分の見出した法が報いられた喜びを、如来はお感じになるのでしょうか。

如来の教えをお受けし、それを信じさせていただいて、人さまの喜びが喜べたら、こんな広い心はありません。それこそ「慈光はるかにかふらしめ」という境地がいつべんにわかります。ぜんぶの修行の方がたの喜びが、みんなこちら側の喜びになる、そういう心境が生まれた人は、それこそ喜びのなかに浸っているようなものです。喜びを肌で感じることでできるのです。それは、念佛者の到達できる境地です。この世に生きている間には、そこまでいかなくても、しかしやがてその境地に生まれさせていただけると、わたしは深く信じているものです。人さまの喜びが自分の喜びに感じられたら、それはそのまま安らぎです。法喜とは、つまり法を喜ぶことです。親鸞聖人が法とおっしゃるのは、本願を信じ念佛をもうす道なのです。それが法の道であります。

(在家佛教協会前理事長・協和醗酵工業元社長)

 **NICHIA**

*Ever Researching for a Brighter World*

蛍光体 (TV用・蛍光灯用・その他)

分散型ELランプ  
化合物半導体材料  
ファインセラミックス  
バナジウム重合触媒

**日亜化学工業株式会社**

本社：徳島県阿南市上中町岡 ☎(0884)22-2311  
東京営業所：港区芝5-27-14 小川ビル ☎(03)3456-3784  
大阪営業所：淀川区宮原4-1-45 新大阪八千代ビル ☎(06)396-7710